BOOK REVIEW

人生のヒント
VOL.2

このコーナーでは、
毎回異なるブックナビゲーターに、
人生やライフプランを考える上での
ヒントとなる本をご紹介いただきます。

ブックナビゲーター
石井 千湖
書評家

【いしい・ちこ】1973年生まれ。早稲田大学卒業後、書店員を経てライターに。現在は新聞や雑誌で書評を中心に執筆活動をしている。共著に『きっとあなたは、あの本が好き。』（立東舎）がある。

REVIEW.1 島はぼくらと

辻村 深月 著

（講談社刊、2013年6月）

直木賞作家が地方で生きる人々を描いた長編小説。舞台は瀬戸内海に浮かぶ小さな島、冴島。一時期は人口が減っていたが、Ｉターンを積極的に受け入れることによって活性化した。地元のおばちゃんたちが特産品を加工する会社を立ち上げ、人気を博したりもしている。高校を卒業したら故郷を離れなければならない少年少女、故郷から逃げてきたシングルマザー、他人の故郷を再生する仕事をしながら各地を渡り歩いている女性。登場人物が遭遇する出来事を通して、故郷とは何かを問う。島には「兄弟」の誓いを交わしたら他人でも家族同然に扱う習慣がある。都会の価値観で見るとしがらみになってしまいそうなものが、希望に結びつくところが素晴らしい。

REVIEW.2 長いお別れ

中島 京子 著

（文藝春秋 刊、2015年5月）

親の介護が気になりはじめる年代の人におすすめしたい、認知症の父と家族の10年間を描いた連作短編集。元国語教師の東昇平は妻とふたり暮らし。娘は家庭や仕事を持ち、実家にはほとんど帰らない。毎年参加していた同窓会の場所がわからなくなったことをきっかけに、昇平はアルツハイマー型認知症と診断される。 収録作の中で最も胸を打たれたのは「つながらないものたち」だ。東日本大震災の直後、昇平は自宅にいるのに〈帰る〉と大騒ぎ。娘がなだめても聞かない。しかし父の壊れた言葉が娘を救うのだ。また最終話の「ＱＯＬ」では、思い出を失っても残る夫婦の絆が浮き彫りになる。深刻な問題を扱いながら読後は前向きな気持ちになれる一冊だ。

REVIEW.3 この世にたやすい仕事はない

津村　記久子 著

（日本経済新聞出版社 刊、2015年10月）

芥川賞受賞作『ポトスライムの舟』など、働く人の現実をユニークな視点で描く著者の最新作。燃え尽き症候群のような状態になって前職を辞めた「私」は、職業安定所の相談員に〈一日スキンケア用品のコラーゲンの抽出を見守るような仕事〉という希望条件を出すが……。30代女性の職探しの冒険物語だ。「私」の体験する五つの仕事が奇妙でありながらどこかに存在しそうな細部を持っていて引き込まれてしまう。特に〈おかきの袋の話題を考える仕事〉が面白い。どうしたら心が折れず、病気にもならず、仕事と適切な関係が築けるのか。「私」の問いが行き着くところに説得力がある。この世にたやすい仕事はないが、難しさのなかに希望も隠れている。